

昔むかし、あるところに三人のきょうだいがありました。三人は森の見張り番で、いちばん上の兄さんは軍曹、二番目は伍長、一番下の弟は一等兵でした。

ある夜のこと、弟の一等兵が森の見張りをしていると、ひとりのおばあさんが通りかかりました。

「すまないが、火にあたらせもらえるかい」と、おばあさんはいいました。一等兵は、

「だめだ。兄さんたちが目を覚ましたら、おまえはころされるぞ」といいました。

「さいふをあげるから、あたらせておくれよ」

「そのさいふで、どうしろっていうんだ」

「このさいふは決して空にならないのさ。手をつっこむたびに、五ルイ金貨が出てくるんだよ」

「じゃあ、こっちによこしな」

一等兵は、さいふをもらって、おばあさんを火にあたらせてやりました。

つぎの夜は、伍長が見張りにつきました。すると、おばあさんが通りかかっていいました。

「すまないが、火にあたらせてもらえるかい」

「だめだ。兄弟が目を覚ましたら、おまえはころされるぞ」

「笛をあげるから、あたらせておくれよ」

「その笛で、どうしろっていうんだ」

「この笛を吹けば、あつというまに、五万の歩兵と五万の騎兵をよべるんだよ」

「じゃあ、こっちによこしな」

伍長は、笛をもらって、おばあさんを火にあたらせてやりました。

つぎの夜は、軍曹が見張りにつきました。おばあさんが通りかかっていいました。

「すまないが、火にあたらせてもらえるかい」

「だめだ。弟たちが目を覚ましたら、おまえはころされるぞ」

「きれいなぼうしをあげるから、あたらせておくれよ」

「そのぼうしで、どうしろっていうんだ」

「このぼうしを使えば、どこでも、行きたい所へ運んでもらえるんだよ」

「じゃあ、こっちによこしな」

軍曹は、ぼうしをもらって、おばあさんを火にあたらせてやりました。

この国に、トランプの大好きなお姫さまがいました。お姫さまは不思議な鏡を持っていて、あいてのカードをこっそり見ることができました。ですから、お姫さまが負けることはありませんでした。

あるとき、一等兵は、お城に行つて、お姫さまとトランプの勝負をしました。お姫さまが勝つて、一等兵は、さいふを取り上げられてしまいました。

一等兵は、すっかり悲しくなつて森へ帰つて行きました。歩きながら口笛をふいていると、おばあさんに会いました。

「口笛をふいているね。でも楽しそうじゃないね」

「まったくだ」と、一等兵が答えると、おばあさんはいいました。

「さいふをなくしたんだね」

「ああ、そうなんだ」

「じゃあ、兄さんに、笛をかしてくるようになのむんだね。笛を使ってさいふを取りもどせるかもしれないよ」

家に帰りつくと、一等兵は、伍長にいました。

「にいさん、笛をかしてくれないか。笛を使ってさいふを取りもどせると思うんだ」

「笛もなくしてしまつたら、どうするんだ」

「心配はいらないよ」

一等兵は、笛を持ってお城に行きました。ところが、またお姫さまが勝つて、笛を取り上げられてしまいました。一等兵は、口笛を吹きながら森に帰って行きました。すると、おばあさんに会いました。

「口笛をふいているね。でも楽しそうじゃないね」

「まっただ」

「笛をなくしたんだね」

「ああ、そうなんだ」

「じゃあ、兄さんに、ぼうしをかしてくるようになのむんだね。ぼうしを使ってさいふと笛を取りもどせるかもしれないよ」

家に帰りつくと、一等兵は、軍曹にいました。

「にいさん、ぼうしをかしてくれないか。ぼうしを使ってさいふと笛を取りもどせると思うんだ」

「ぼうしもなくしてしまつたら、どうするんだ」

「心配はいらないよ」

一等兵は、お城に行き、またお姫さまが勝つて、ぼうしをとりあげられてしまいました。一等兵がひどく悲しんで帰って来ると、おばあさんに会いました。

「口笛をふいているね。でも楽しそうじゃないね」

「まっただ」と、一等兵が答えると、おばあさんはいました。

「ぼうしをなくしたんだね」

「ああ、そうなんだ」

「じゃあ、ここにりんごがあるから、一個につき一ルイで売るんだよ。買えるのはお姫さましかいないからね」

おばあさんはそういうと、りんごがいくつか入ったかごを一等兵にわたしました。

一等兵は、お城の前にりんごを売りにいきました。お姫さまは、召し使いの女に見に行かせました。召使いはもどつて来て、

「男がりんごを売っております」といいました。

「いくらで売っているの」

「ひとつ一ルイでございます」

「ずいぶん高いのね。でもかまわないわ」

お姫さまは、りんごを五つ買って、ふたつを召使いに与え、あとの三つを食べました。するとたちまちふたりの頭に角が生えました。召使いの頭には二本、お姫さまの頭には三本の角です。角を切るために、国一番のお医者がよばれました。でも、切れば切るほど、角は大きくなりました。

さて、おばあさんは、一等兵にいました。

「ここに水のびんが二つある。ひとつには、角をはやす薬が入っていて、もうひとつには、角を取る薬が入っている。これを持ってお城に行くといいよ」

一等兵はお城に行くと、

「お姫さまの角を取ってみせます」といいました。そして、まず召使いの角に、角を取る薬をぬりました。角は二本ともポロリと取れました。つぎに、お姫さまの角に、もうひとつのびんの薬をぬりました。角は前よりずっと大きくなりました。一等兵はお姫さまにいました。

「何か、心にとがめることがおありでしょう」

「いいえ。何もありません」

「でも、召し使いの角は落ちたのに、あなたの角は大きくなっていますよ」

お姫さまは、

「あら、そうでした。くだらないさいふを持っていました」といいました。一等兵は、

「そのさいふをどうなさいますか」とききました。

「持ち主に返していただけますか」

「もちろんです。かならずお返しいたします」

お姫さまは、さいふを一等兵にわたし、一等兵はお姫さまの角を一本落としました。

「お姫さま、まだ何か、心にとがめることがおありでしょう」

「いいえ・・・あら、そうでした。くだらない笛を持っていました」

「その笛をどうなさいますか」

「持ち主に返していただけますか」

「もちろんですとも」

お姫さまは笛をわたし、一等兵は角を一本落としました。でもまだ一本残っています。

「まだ何か、心にとがめることがおありですね」

「いいえ。もう何もありません・・・あら、くだらないぼうしをもっていました」

「そのぼうしをどうなさいますか」

「返してくださいかしら」

「もちろん、お返ししますとも」

一等兵は、ぼうしを受け取るやいなや、

「ぼうしの力よ、ぼくを見さんたちの所へ運んでくれ」といいました。

あつというまに一等兵のすがたはきえました。お姫さまの頭には最後の角が残りました。このあいだ、わたしがお姫さまに会ったとき、まだ角をはやしていましたよ。

原話：『世界の昔ばなし9 フランスの昔話』新倉朗子訳／小峰書店

再話：村上郁